

郡上八幡における町並みの 変遷実態とそのメカニズムに関する研究

5221D001-2 舩場星澄*

町並みは地域住民の生活の基盤である建物の連担であり、地域の人々のライフスタイルが反映された風景であると考えられ、今後の町並み保全を考えるにあたってはその変遷メカニズムの解明が求められる。本研究では、岐阜県郡上市八幡町の中心市街地を対象に、建物写真の分析と住民へのインタビュー調査を通じてファサードの変遷実態と、変遷の背景やそれに起因するライフスタイルの変化、変遷に関与した主体などを把握し、複数のファサードの変遷プロセスや要因の集合として、町並みの変遷メカニズムを示した。結果、用途変化を伴う建物の変化が中心部へ遷移していること、町家の建ち並ぶ町並みに特有の敷地割をはじめとする地域固有のビルディングタイプが、ファサードの継承の要因の一つであると明らかになった。

Key Words : 郡上八幡, 町並み, ファサード, 変遷, メカニズム

1. 序論

(1) 研究の背景と目的

日本の各地域においては、気候風土への適応や、建築材料、工法の制限を受けて地域に根差した住宅が生産され、その連担として地域特有のまとまりのある町並みが形成されてきた。その一方で、これらの町並みは近代化の過程の中でまとまりや地域性を喪失する危機に晒され、これに対して重要伝統的建造物群保存地区の選定や地域住宅計画 (HOPE 計画) など、町並みの歴史性の保全や町並みを構成する建物に地域性を取り戻す活動が行われてきた。

歴史性や地域性に重点を置くこれらの取り組みは、近代化の過程で生じた町並みの綻びを整えることには一定の成果を上げた。しかし、近年の少子高齢化や過疎化に伴うライフスタイルの変化と、これまでの町並み保全の取り組みとの齟齬によって生じる課題が指摘されている¹⁾。これらの課題に適合し、今後のライフスタイルに即した町並み保全を考えるためには、まずは町並みの変遷を紐解いていく必要がある。

町並みは、地域の住民の生活の基盤である建物の連担であり、その変遷は条例や町並み保全の取り組みによるところもあるが、生業、居住形態など個々の建物の利用者の生活の事情や意向によるところが大きい²⁾。したがって、地域の住民のライフスタイルの観点から町並みの変遷を考える際には、町並みを構成する個々の建物のファサードを住民の生活の

様子の表れと捉え、変遷の背景にある様々な要因を含んだ動的なメカニズムとして捉える必要がある。

筆者らは先行研究⁴⁾において、早稲田大学佐々木葉研究室が永らく研究フィールドとしてきた岐阜県郡上市八幡町の中心市街地 (以下、郡上八幡と呼ぶ) を対象に、ほぼ 10 年ごとの 3 時点において調査した約 600 件のファサードの写真をもとに分析を実施した。結果として、郡上八幡の町並みを構成するファサードの類型を特定し、その変化の傾向を明らかにした。本研究では、先行研究で明らかになった変遷の背景にあたる個々の建物の利用者の生活の事情や意向、変遷に関与した主体などをインタビュー調査により明らかにし、それら様々な要素と複数のファサードの変遷プロセスの集合としての町並みの変遷メカニズムを明らかにすることを目的とする。

(2) 既存研究の整理

これまでの町並み保全に関する研究は、代表的な施策である a) 伝統的建造物群保存地区に関する研究や、b) 地域住宅計画に関する研究に蓄積がみられる。また、c) 地域の建物生産、更新や維持管理に関する研究や、d) 町並みの変遷の実態やその要因に着目した研究もみられる。以上 4 点を本研究に関連する既往研究として整理し、本研究の位置づけを示す。

a) 伝統的建造物群保存地区に関する研究

伝統的建造物群保存地区 (以下、伝建地区) に関しては、修理・修景事業、保全事業に着目した研究や、制度上の課題に着目した研究があり、本研究の

*早稲田大学大学院創造理工学研究科建設工学専攻 景観・デザイン 佐々木葉研究室 修士2年

関心に近い。北山ら⁵⁾の研究は、修理・修景の補助対象となる改修箇所を明らかにした。畔柳ら⁶⁾の研究は、伝建地区内の修理・修景に携わる建設業従事者の数や収益といった実態を明らかにし、地域の建設業従事者への支援が必要だと指摘している。金ら⁷⁾は、伝建地区の現状変更の実態と住民のニーズを把握し、生活上の要求と保全基準の乖離を指摘している。また、畔柳²⁾らの研究では、伝建地区を生活空間として捉え、全国の伝建地区における日常的な生活を支える施設と雇用発生地域の有無を調査し、生活環境の評価を行っている。その上で、自治体の施策においては、歴史性を重視し生活との関連性を想定したものが少ないことを指摘し、伝建地区を生活空間として扱う上での計画上の課題を明らかにしている。

b) 地域住宅計画に関する研究

地域住宅計画(HOPE計画)に関する研究として、計画に関連したまちづくり組織に着目した研究⁷⁾や、計画が適応された地域での町並みの変容の実態を明らかにした研究⁸⁾がみられるほか、2013年には計画の三十周年と地域住宅計画推進協議会の解散を記念して、計画全体のレビューを行った地域住宅計画三十周年記念誌⁹⁾が発行されている。川崎はこの紙面で、HOPE計画の成果として地域文化や地域産材、地域生産体制等の確立があり、反対に課題としては住宅政策の地方分権化が期待よりも進まなかったことを挙げている。また秋山¹⁰⁾は、建築基準法の性能規定化や民間検査機関の確認など、品質管理に関する制度上の負担が大きいことや、生産の担い手となる現場技能者の不足・高齢化を課題として指摘している。

c) 地域の建物生産、更新や維持管理に関する研究

井上ら¹¹⁾の研究は、従来の町並み保全型まちづくりの課題として技術継承の不足を指摘し、HOPE計画の実施された事例の分析を通じて、大工が積極的に関与する技術継承型の町並み保全を示している。益尾ら¹²⁾は、伝統的家屋の維持管理や地域の新築工事の担い手を地域住宅生産体制と位置づけ、その生産を保存する方策を論じている。工事統計や維持管理の実態の把握を通じて、集落内の維持管理だけでなく周辺集落と連携した維持管理や、地域内の別需要にも対応するといった形で工事量を確保することが、地域の建設業の生産保存のために必要だと指摘している。

住民自身による維持管理に着目した研究もみられる。中村¹³⁾による研究では、文献を通じて伝統的な住宅における日常的な維持管理の実態を分析し、それらが生活、行事と一体化した行為であると指摘し

ている。また藤平ら¹⁴⁾は、ヒアリングを通じて伝統的木造住宅の日常的な手入れの実態を明らかにし、改修や建替えのきっかけや施工者との関わりにも触れ、今後の維持管理においては地域内、さらには地域外も含む共助などが求められると指摘している。

d) 町並みの変遷の実態やその要因に着目した研究

清野¹⁵⁾の研究では、伝建地区である川越一番街を対象に、敷地用途と外観の変化を明らかにしている。敷地用途の変化としては併用住宅から商業、博物館への転換が見られ、観光化に伴う町家の空間構成ルールの断絶があることを指摘している。また外観の変化としては、看板ファサードの除去など歴史的な復元、修景によるものが多く見られると指摘している。ハノイ旧市街を対象とした内海¹⁶⁾の研究では、2時点の建物調査をもとに、店舗化の進行、業種の観光産業化に伴う建物外観の変化など、営利目的での保存対象の町家の取り壊しなどが起きていることを明らかにしている。これらの研究では町並みや用途変化の実態からその背景の要因を考察しており、筆者らの先行研究のアプローチに近い。

森下ら¹⁷⁾の研究では、函館市西部地区を対象に、町並みの色彩に着目してその変化実態、ヒアリングを通じた住民の過去の記憶、色彩選択の意思決定に関して調査している。一定の調和を保った色彩の変化のしくみは、塗装業者、近隣の支援体制や、色彩にまつわる住民の記憶などが関係づけられた構造にあると明らかにしており、町並みの変化に関わる様々な要因間の関係を示していることから、本研究で試みるメカニズムの分析に関心が近い。

(3) 本研究の位置づけ

伝建地区に関する既往研究からは、歴史性に基づく施策と住民のライフスタイルの乖離が課題として確認され、地域住宅計画に関する研究からは、住宅生産の担い手が建物の地域性を保全するために重要であることが確認できた。

その一方で、地域の建物生産、更新や維持管理に関する既往研究からは、町並みを構成する建物の生産の担い手である建設業を生業として持続させていくことの困難さが伺え、住民自身の手による維持管理においても、旧来の生活習慣と密着したそれらの行為を新たな生活習慣においても持続させていくための方策が検討されている。

本研究のアプローチに近い、町並みの変遷の実態やその要因に着目した研究では、建物の外観や用途などの情報をもとにその要因を考察する研究がみられる一方で、住民に実際に聞き取りを行い、個別の建物の具体的な変化要因を探る研究もみられるもの

の、対象は色彩などファサードの部分的な要素に限定されている。本研究では、ファサードの変化・不変化双方を含めた通時的な移り変わりを変遷として捉え、ファサード全体の変遷実態及びそのメカニズムに着目する点に特徴がある。

(4) 研究の構成

本研究では、岐阜県郡上市八幡町の中心市街地を対象に、三時点の建物写真の比較を通じてファサードの外観の変遷の実態を明らかにするとともに、変化の規模を特定する。続いて、大規模な変化が見られた物件と小規模な変化にとどまる物件に対してインタビュー調査を実施し、変化の要因あるいは変化しなかった要因を聞き取るとともに、ファサードの変化前後の暮らしの変容や、変化に関与した主体、意思決定などを探る。以上を通じて個々のファサード変遷の要因を収集し、インタビュー調査の書き起こしの分析を通じて、ファサード変遷の全体像として地域の町並みの変遷メカニズムを明らかにする。

2. 研究対象地

(1) 岐阜県郡上市八幡町中心市街地の概要

本研究の対象地である岐阜県郡上市八幡町の中心市街地、通称郡上八幡は、江戸期に城下町として整備された町割や用水などの基盤を今日まで残す地域であり、市街地を二分する吉田川の北側、北町と称される地区(図-1)では、1917年の大火後に建築された町家が並ぶ町並みが残され、伝建地区に選定されている。吉田川の南側、南町と称される地区(図-2)には、大火の影響を受けずに江戸期から残された建物が一部存在するが、多くの建物は町家の伝統的な構造形式は残しつつもアルミサッシやトタンなどの現代的な材質に置き換えられたファサードや、軒や庇が見られない看板建築など、時代に応じて改修、改築、あるいは建替えられた建物による町並みが見られる。

(2) 郡上八幡での町並みに関するまちづくり活動

郡上八幡では、2012年の北町の伝建地区指定以前からも様々な町並み保全の取り組みが行われている。

郡上八幡におけるまちづくり活動の契機は、1970年代の渡部一二らの水環境調査であり、これを受けて水環境を活かしたまちづくり活動が始まった。水をテーマに取り組む住民組織さつきの会の発足に続いて、1986年の柳町町並み保存会、1991年の職人町町並み保存会、1993年の鍛冶屋町町並み保存会の設



図-1 北町の町並み



図-2 南町の町並み



図-3 調査対象エリア(国土地理院地図に加筆)

立と、町並み保存に取り組む住民組織が生まれ、住民主体による建物のデザイン審査等が行われ、まちづくりは町並み整備へと展開する。1991年には、景観基本計画・景観条例が制定され、町並みに関するまちづくり活動は郡上八幡全域へと拡大した。

これらのテーマごとの取り組みに続いて、より総合的なまちづくりに向けて1996年には八幡町都市計画マスタープランが策定された。これに応じて2001年から行われた街なみ環境整備事業では道路美化や照明整備等が進められ、対象地区ではまちづくり町民協定が締結されたほか、1998年のまちづくり協議会の設立など、市街地全域での町並み整備がさらに進められていく。

以上のような取り組みを受けて、初期に自主的な保存会のあった北町の一部は2012年に重要伝統的建造物群保存地区に指定された。さらに、歴史まちづくり法に基づいて郡上市歴史的風致維持向上計画が2014年に認定され、重点地区での電線類無電柱化など、現在も継続して町並みに関したまちづくり活動が展開されている。

(3) 郡上八幡の基本的なビルディングタイプ

郡上八幡の基本的なビルディングタイプは、間口が狭く奥行きが長い敷地に、前面の壁面を街路との境界部に備え、左右は隣と接して建つ切妻平入の2階建ての町家である。先行研究¹⁾では、以上の町家の基本的要素に加えて、軒や庇、高さ方向の分節、1階部分の開口面積や木質系の材質などに注目してファサードのタイプ分類を行っている。

この分類を通じて、軒や庇、格子などの伝統的要素が無く材質も非木質なものとする現代的なファサードにおいても、1階部の開口が大きくとられ、壁面が通りとの境界部に面しているケースが多く確認された。このことから、郡上八幡においては、通りに対してオープンである住まい方を継承しつつも、材質や意匠などは現代的なものへと更新が行われてきたと考えられる。

3. 建物写真の比較によるファサードの変化実態の分析

(1) 建物写真データの概要

図-3に示す、伝建地区に指定されたエリアに隣接し、主要な通りに面した建物を対象に撮影した写真データを用いて分析を実施する。写真は、それぞれの敷地につき、1999年7月に日本福祉大学佐々木葉研究室が撮影したもの、2010年11月に早稲田大学佐々木葉研究室が撮影したもの、2020年9月に筆者らが撮影した3時点のものがあり、筆者らは先行研究にてこのデータから郡上八幡のファサードのタイプの抽出、ならびにこれの変化パターンの特定を行っている。本論文では、建て替え、改修、維持管理などの建物に手が加えられた規模を把握することを目的として、写真データからファサードの変化箇所の特定を行う。

(2) ファサードの変化を把握する項目

郡上八幡のファサードの基本的な特徴を踏まえ、また伝建地区における現状変更の実態を把握した研究⁹⁾を参考にして、本研究では図-4に示す5項目の変化を写真の比較により把握した。

軒高、間口、壁面の位置による建物の基本的な外形をシルエットとして捉え、壁面の開口部や軒、庇などの構成部位の形状をパートとして捉える。また、それぞれの構成部位の材質および色彩をテクスチャとし、建具や格子、高欄などをエレメント、室外機などの建築設備や看板などを付属物として捉える。また、各項目においては、例えば建て替えによってシルエットが変化しその他の項目が従属的に変化するなど、他の項目の変化と連動しているものを区別するための判定や、シルエットでは取り壊し、テクスチャでは色彩のみの変化、付属物では看板の変化を伴うものを区別する判定を設けている。

以上の5項目の検討をそれぞれの建物に対して行い、1999年から2010年にかけての変化と2010年から2020年にかけての変化の2つのデータセットを

得た。

(3) ファサードの変化の傾向

表-1に、5項目の全ての判定結果をもとに、それぞれの判定結果を小分類としてまとめ、最も規模の大きい変化項目を大分類として、各分類に該当する建物の軒数を示した。

1999年から2010年にかけて（以下、前半）の変化と、2010年から2020年にかけて（以下、後半）の変化いずれでも最も件数が多い分類は、5項目すべてで変化が見られない「変化なし」に該当するもので、他に件数の多い分類も、「付属物」や「エレメント」のみの変化に留まるものであり、ファサードの基本的な要素を変えずにゆるやかに変化の様子が確認された。この他、シルエットの変化に連動して他項目が変化する「建替え」や「取り壊し」、部分的な改修である「パートの変化箇所のみでの変化」

項目名	模式図	判定
シルエット ・軒高 ・間口 ・壁面の位置		変化なし 変化あり 取り壊し 空地
パート ・開口部の形状 ・軒、庇の形状 ...		変化なし 変化あり 他項目の変化に連動 空地、新築、取り壊し
テクスチャ ・壁面の材質、色彩 ・軒、庇の材質、色彩 ...		変化なし 変化あり 塗装のみの変化 他項目の変化に連動 空地、新築、取り壊し
エレメント ・出入口、窓 ・格子 ・高欄 ...		変化なし 変化あり 他項目の変化に連動 空地、新築、取り壊し
付属物 ・室外機 ・プロパンガス ・看板 ...		変化なし 変化あり 看板・サインの変化 他項目の変化に連動 空地、新築、取り壊し

図-4 ファサードの変化を把握する5項目

表-1 ファサードの変化の分類と集計結果

番号	大分類	小分類	件数	
			1999~2010	2010~2020
1	シルエットの変化	建替え	26	13
2		空地での新築	4	4
3		建替えに至らない改修	2	0
4		取り壊し	24	18
5	パートの変化	パート変化箇所以外での変化を伴うもの	6	18
6		パート変化箇所のみでの変化	35	27
7	テクスチャの変化	材質の変化	26	13
8		色彩の変化	13	23
9	エレメントの変化		53	30
10	付属物の変化	看板の変化	72	65
11		設備のみの変化	69	57
12	変化なし		280	326
13	空地		7	24
14	その他		8	7
	計		625	625

といった分類が件数の多いものとして挙げられる。それぞれの敷地において3時点間全体での変化の分類を表-2に示す。前半、後半どちらも全く変化が見られなかったものが最も多く155件で、シルエットやパートなどの項目が前半で変化し、後半で全く変化していない物件も多く見られた。前半で更新された建物が後半ではそのまま住まわれる様子を示していると考えられる。

(4) ファサード・用途変化の分布

以上の変化を、それぞれの項目ごとにマッピング

表-2 3時点間全体での変化の分類と集計結果

前半の変化分類	後半の変化分類														計
	1	3	2	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3	22	0	0	26
2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	4
3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2
4	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19	4	24
5	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	4	0	0	6
6	1	0	0	0	1	1	0	2	0	5	6	19	0	0	35
7	0	0	0	0	1	2	0	1	0	2	4	16	0	0	26
8	1	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	9	0	0	13
9	0	0	0	0	3	1	1	0	6	7	5	30	0	0	53
10	6	0	0	4	2	8	3	4	2	12	5	26	0	0	72
11	1	0	0	2	1	3	4	3	5	5	7	38	0	0	69
12	4	0	0	9	10	12	4	13	15	33	25	155	0	0	280
13	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	7
14	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3	8
計	13	0	4	18	18	27	13	23	30	65	57	326	24	7	625

* 分類の番号は表-1に従う。

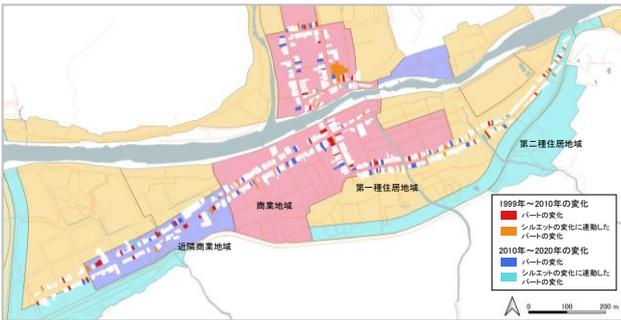


図-5 パートの変化がみられた建物の分布

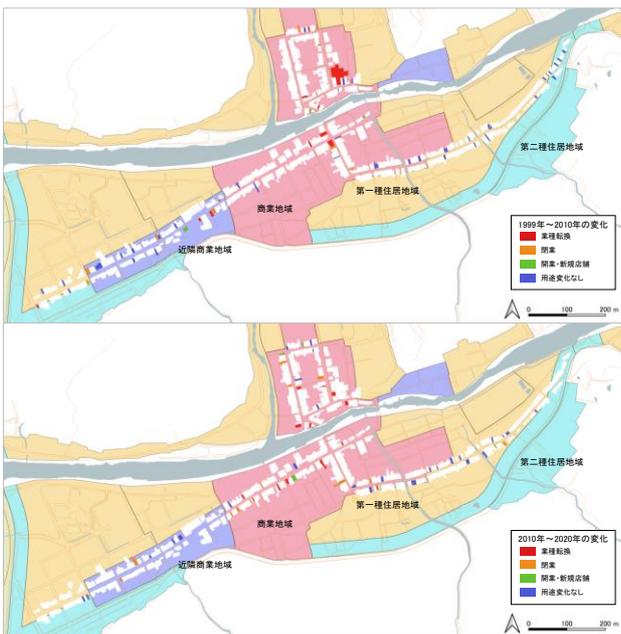


図-6 パートの変化がみられた物件の用途変化の分布

して傾向をみた。以下、特徴的な分布がみられたパートの項目について述べる。

パートの変化がみられた建物の分布(図-5)からは、前半では周縁部の住居地域で見られた変化が、後半では商業地域である中心部へと遷移している様子が確認できる。

図-5で示した物件について、その用途変化を、業種転換、閉業、開業・新規店舗、用途変化なしの4項目に分類し、前半、後半それぞれの分布を示した(図-6)。前半でのパートの変化は用途変化を伴わない住宅の改修が多く、後半でのパートの変化は中心部での閉業に伴う店舗から住宅への用途転換や、観光を意識した店舗への業種転換、空き家の利活用による新規店舗開業などの傾向が見られる。

4. 個々のファサードの変遷の要因と変遷に関与した主体

本研究の対象である、1999年から2020年の間のおよそ20年間でのファサードの変遷に対して、その要因や変遷に関与した主体についてインタビュー調査を実施した。本章では大規模な変化が見られるシルエットとパートの項目で変化が見られた物件を対象に、インタビュー調査で得られた情報の集計結果を示す。

(1) 大規模な変化のある物件を対象としたインタビュー調査の概要

調査対象625件のうち、調査対象期間のおよそ20年間のいずれかの時点でシルエット、パートの項目で変化がみられたものは132件であった。このうち、既に取り壊されて空地となっているもの倉庫など調査不能なものを除いて121件を対象にインタビュー調査を実施し、47件の回答を得られた。表-3に調査の概要を示す。

(2) ファサードの変化に至った要因

表-4に、インタビューを通じて得られたファサードの変化に至った要因を9種に分類し、その集計を示した。最も多く見られた要因は老朽化で、シルエットの変化を伴う物件において最も多く占める要因となっており、建て替えに至る主要な要因となっている。一方で、シルエットの変化を伴わない物件においては、変化の主要な要因として業種転換に伴うものや外観、機能の改良が挙げられている。複合的な要因に着目すると、住み替えに伴って老朽化していた建物を改修するケースや、老朽化の解消に合わせ

てトイレの水洗化など水回りの改良を行うケースが見られた。

(3) ファサードの変化パターンと変化要因の関係

先行研究⁴⁾では、各時点のファサードの特徴ごとにタイプ分けを実施した上で3時点全体でのタイプの移り変わりとして、各物件のファサードの変化パターンを特定している。このファサードの変化パターンと、主な変化要因との関係を以下に示した(表-4)。表中のグラフは各列におけるデータの占める割合を示す。住居が建て替えを経て現代的な住居になるパターンでは、老朽化を主な要因とするものが多く占めることが確認できる。また、業種を継承して改修が行われるパターンでは、同じ飲食店の業種を継承しつつも店舗の所有者が変わり、ファサードの印象を新たな店舗に合わせて改修するケースが多く見られた。このほか、先行研究ではファサードのタイプの変化までに至らないとされたケースにおいてもシルエット、パートの変化があり、業種転換や改良といった要因によって大規模な変化を経た後も旧

来のファサードの特徴を残して建物が用いられている様子が確認できる。

(4) ファサードの変化に関与した主体の傾向

ファサードの変化に携わった主体として、施工者、設計者及び下請けと、それら業者と住民との関係を調査した。以下にその傾向を示す(表-6)。施工者としては、市内の工務店、大工に依頼するケースが多く見られ、施工者に一括で設計を依頼するほか、住民が自身で個別に設計者を選ぶケースも見られた。また、建具や設備を担当する下請け業者も住民が自身で個別に選定するケースもあり、これは特に施工者が大工と選定されている場合に多くみられ、仕事上での付き合いや親戚、知人関係にある馴染みの業者を選定する、出入り関係に類似した関係にあることが明らかになった。

5. テキストデータの分析を通じた町並みの変遷メカニズムの分析

本研究の対象物件は、建設業者や設計者が関与するような大規模な変化に比して全く変化していないものや小規模な変化に留まる物件の数が多くを占める(3章)。個々のファサードの集合として町並みを捉える際にはこれらの物件にも注目する必要があるため、インタビュー調査を実施した(表-6)。

これらの小規模な変化に留まる物件は、その要因

表-3 大規模な変化のある物件を対象としたインタビュー調査の概要

調査対象	写真分析の期間のいずれかの時点においてシルエット・パートの項目で変化が見られた住宅・店舗121件
調査期間	2022年10月24日～11月3日
調査方法	対面による半構造化インタビュー調査
回答件数	47件(回答率38.8%)
調査項目	・建物を変更した理由 ・依頼した業者に関して ・以前の生活様式との比較 ・現状の不満足・満足点 ・補助の有無 ・規制に関して など

表-4 変化要因とシルエットの変化状況の関係

主な要因	複合的な要因	シルエットの変化		計
		有	無	
老朽化	家族構成	6	2	8
	改良	2	0	
	改良	1	0	
閉業		2	3	5
新店舗		1	1	2
住み替え	改良	1	1	2
	老朽化	1	0	
	老朽化	1	2	
業種転換	閉業	2	7	9
	改良	0	1	
	改良	0	6	
改良	老朽化	0	1	1
	改良	1	2	
	改良	0	1	
家族構成	改良	0	1	1
	改良	1	0	
	閉業	1	0	
その他		0	1	1
総計		19	28	47

表-6 ファサードの変化に関与した業者の集計

施工者	設計者	下請け選定タイプ			計
		一括依頼	個別選定	なし	
DIYタイプ	なし			2	2
市外工務店	一括依頼	1			
市外大工	施工業者と同じ	2			3
	個別選定			1	
市内工務店	不明			1	2
	なし	1			
	個別選定	4	1		
市内大工	施工業者と同じ	8	3	1	12
	不明			2	
	なし	1	1	1	
不明	個別選定	2	3		5
	施工業者と同じ	5	3		
	不明			1	
不明	不明			3	3
総計		24	11	4	8

表-5 ファサードのタイプ間の移り変わりを示した変化パターンと変化要因の関係

ファサード変化パターン	以前の用途	住居						その他	ファサードタイプ不変化	総計
		改修		建て替え		改修				
		住居	住居	住居	住居	店舗	住居			
老朽化	0	0	4	1	2	0	1	**1	2	11
閉業	0	*1	0	0	0	2	1	0	1	5
新店舗	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2
住み替え	1	1	1	0	0	0	1	0	2	6
業種転換	0	0	0	***4	1	1	0	0	4	10
改良	0	2	2	0	1	1	0	0	3	7
家族構成	0	2	0	1	0	0	2	0	0	5
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
総計	1	6	5	7	5	4	5	1	13	47

* もとは店舗ではなく繊維工場だった建物を閉業して住居としたケース。店舗ではないためもとの用途を住居とするパターンに該当する。
 ** 業種も建物所有者も継承した店舗が建て替えによって変化したケース。
 *** 先行研究では、飲食店が他の飲食店になるケースも業種が継承されているとしてパターン分類を実施しているが、本調査では建物利用者が変わった店舗なども業種転換に加えている。

が大規模に変化しているものに対して明確でない。そのため本章では、前章で示したファサードの変遷の要因、関与した主体に加えて、変化前後での暮らしの様子や、住まいに対する要望・満足、世帯構成、変化における意思決定のプロセスなどにも注目して、町並みの変遷メカニズムの分析を試みる。

(1) 分析手法

インタビュー調査の書き起こしデータに対する分析手法として、木下¹⁸⁾によって提示された修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA)を導入する。ただし、本研究では各ファサードにおける変化規模の差なども視野に入れて分析を行うため、その手法をアレンジしている。M-GTAでは、設定した「分析テーマ」「分析焦点者」の観点から関連する箇所をテキストから抜きだして概念を生成し、概念のまとまりとしてのカテゴリー間の関係をみて、ある事象のプロセスや構造などを明らかにする。本研究では分析テーマを「郡上八幡における、ファサードの集合としての町並みの変遷メカニズム」と設定し、複数のファサードの変遷ケースを総合して分析を行うために、分析焦点者をファサード変化規模を問わず一括で「町並みを構成する建物の住民」と設定する。

(2) 分析結果

以上の分析によって得られた、概念およびカテゴリーの関係図を図-7に示す。町並みの変遷メカニズムとしては、ファサードの変遷の契機から変遷後の環境、将来への意向などに至るファサード変遷のメインプロセスと、それを構成するカテゴリーや概念に影響を及ぼす周辺要素の大きく2つからなる構造が示された。ここでは、小規模な変化や更新を行わないケースの要因、住民の積極的な関与、ファサードの変遷前後のライフスタイルの変化の3点に着目する。

小規模な変化に留めたり更新を行わないケースにおいては、積極的な継承によるものと消極的な継承によるものが見られる。積極的な継承の要因としては、建物を先祖から継承するという意識や、城下町らしさを維持する意識、現状の環境に対する満足感

などが見られた。一方で消極的な継承は、嫁いできたことや借家であることから建物に愛着を感じないこと、建て替えによって建築面積が減少することを嫌うもの、隣と接続していることによる改装の困難さがあり、隣と接して通りとの境界まで敷地いっぱい建つ、町家で構成された町並みに特有の敷地割りに起因するものが見られ、郡上八幡の基本的なビルディングタイプとの関連が考えられる。これに関連がある概念やカテゴリーは他に、木質系の町家への馴染みなどがあり、現在の環境に対する満足感へと繋がって積極的な継承の要因となっている。その一方で、町家特有の細長い敷地では敷地奥の工事等が困難であり、結果として部分的な改修ではなく全体的な建て替えに至るケースも見られた。

ファサード変遷のメインプロセスに着目すると、住民の建物の変更への積極的な関与があるケースを下支えするものとしては、城下町らしさを維持する意識や、閉業後も商店街らしさを維持する意識のほか、住民の建物やファサードに対する趣向がはっきりとしているなどの住民の意識が示された。

ファサードの変遷前後のライフスタイルに着目すると、プライバシーの確保を意図した変化や、気密性の向上に至った変化が、通りを歩く人が立ち寄るような偶発的な付き合いの減少に至る様子などが確認された。しかし、主要なライフスタイルの変化に関わると考えられる用途の変化や家族構成の変化はファサードの変遷後の環境に起因するものではなく変遷の契機となる箇所に該当し、それらは現状の建

表-6 小規模な変化に留まる物件を対象としたインタビュー調査の概要

調査対象	写真分析の期間においてテクスチャ(色彩のみ)・エレメントの項目で変化が見られた住宅・店舗101件
調査期間	2022年12月19日～12月24日
調査方法	対面による半構造化インタビュー調査
回答件数	23件(回答率22.8%)
調査項目	・建物を変更せずに維持する理由・以前の生活様式との比較 ・現状の不満足点、満足点・将来の意向 など

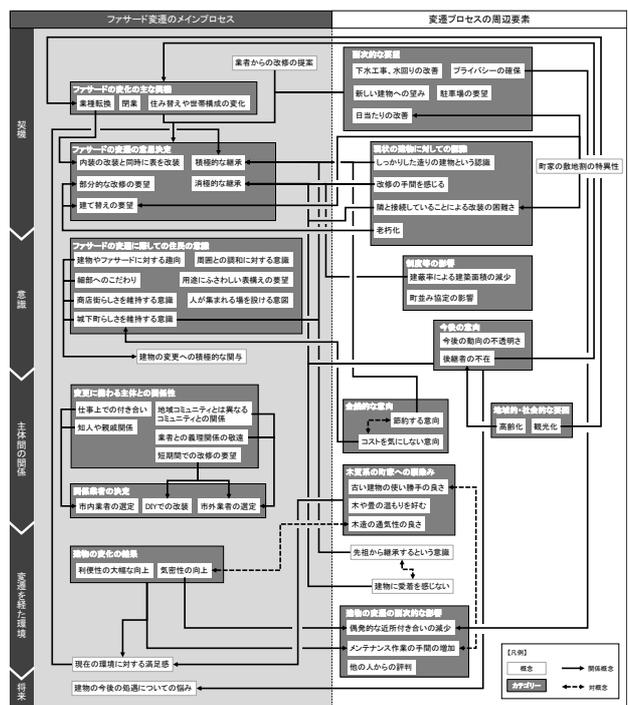


図-7 ファサードの集合としての町並みの変遷メカニズムの概念関係図

物に対する認識、制度等の影響、地域的・社会的な要因に影響されている構造が示された。

6. 結論

本研究の成果は以下の通りである。

- 1) 郡上八幡における 1999 年から 2020 年にかけての建物の変化を、ファサード写真をもとに分析した。その傾向として大半の建物は全く変化しないか小規模な変化に留まり、2010 年から 2020 年にかけては用途転換を伴う商店街中心部での変化が多いことを明らかにした。
- 2) 調査対象物件にインタビュー調査を実施し、ファサードの変化要因と変化傾向の関係、先行研究でのファサードタイプの変化パターンとの関係を示した。また、ファサードの変化に関与した主体間に、住民自身の業者を選定する出入り関係に類するものがあると示した。
- 3) インタビュー調査から得られたテキストデータに対して M-GTA の手法を援用した分析を行い、ファサードの集合としての町並みの変遷メカニズムを明らかにした。その結果、ファサードの変遷のメインプロセスとそれに影響を及ぼす周辺要素があり、特にファサードの継承においては、町家で構成された町並み特有の敷地割など、郡上八幡の基本的なビルディングタイプがその要因として示された。

郡上八幡においては、古くからの都市構造が継承され、その都市を構成する町並みにおいても町家特有の集住形態である敷地割とその利用が継承されてきたことが、ファサードを継承し、地域に固有の住まい方を継承する要因の一つにあると考えられる。時代に適合したライフスタイルと地域固有の住まい方の継承を両立させていくためにも、敷地割とそこでの建物利用に着目した施策が期待される。

<参考文献>

- 1) 金弘己, 宗本順三: 伝建地区の現状変更行為における住民の建築希望内容と町並変容の研究: 近江八幡市を事例として, 日本建築学会計画系論文集, 64 巻, 518 号, pp. 229-236, 1999
- 2) 畔柳知宏, 藤田康仁, 篠野志郎, 服部佐智子: 生活環境としての重要伝統的建造物群保存地区の活用可能性と当該市町村による認識, 日本建築学会計画系論文集, 83 巻, 750 号, pp. 1591-1598, 2018
- 3) 佐々木葉, 井下田渉: 地方都市における個別建物更新のメカニズムと景観まちづくり - 個々の住民の暮らしの総体的方向性のマネジメントと町並の位置づけ-, 第 45 回土木計画学研究発表会・講演集, No.45,

(65), 2012

- 4) 家田雅之, 佐々木葉, 冨場星澄: 郡上八幡における町並みを構成するファサードの特徴と変化, 景観・デザイン研究講演集, No. 17, pp. 324-329, 2021
- 5) 北山めぐみ, 山本直彦, 増井正哉, 平尾和洋: 名古屋市有松町並み保存地区における伝統的建造物の修理実態に関する研究, 日本建築学会技術報告集, 19 巻, 43 号, pp. 1105-1110, 2013
- 6) 畔柳知宏, 藤田康仁, 服部佐智子: 修理修景の継続性からみた重要伝統的建造物群保存地区における建設業従事者の実態, 日本建築学会計画系論文集, 85 巻, 767 号, pp. 213-222, 2020
- 7) 三棹聖史: 地域住宅計画 (HOPE 計画) に関連したまちづくり組織の意義とその活動実態に関する考察, 都市住宅学, 2000 巻, 31 号, pp. 70-73, 2000
- 8) 清水浩晃: 地域型住宅への更新による町並み再生に関する研究 「町並の復権」期における富山市八尾町諏訪町を対象に, 都市計画論文集, 54 巻, 3 号, pp. 1043-1050, 2019
- 9) 地域住宅計画推進協議会: 地域住宅計画 三十周年記念誌, 2013
- 10) 秋山哲一: 地域の住宅生産システム, その独自性と課題, 住宅総合研究財団研究年報, 26 巻, pp. 19-29, 2000
- 11) 井上豊宏, 村橋正武: まちづくりと連携した大工技術の継承方策に関する研究, 都市計画論文集, 43.3 巻, pp. 397-402, 2008
- 12) 益尾孝祐, 後藤治: 歴史的地区における地域住宅生産体制の役割とその生業保全に関する研究 福島県南会津町前沢集落を事例として, 日本建築学会技術報告集, 22 巻, 50 号, pp. 297-302, 2016
- 13) 中村琢巳: 家屋敷のメンテナンスの内容, 頻度, 季節との対応について: 『富澤家日記』からみた家屋敷の維持に関する研究(その 2), 日本建築学会計画系論文集, 68 巻, 570 号, pp. 103-107, 2003
- 14) 藤平真紀子, 村田順子, 田中智子: 伝統的木造住宅における維持管理の変遷と今後の継承—ヒアリング調査による維持管理の実態把握と今後の課題—, 日本家政学会誌, 66 巻, 6 号, pp. 272-283, 2015
- 15) 清野隆: 川越一番街における歴史的環境の変容に関する研究, 歴史的建造物の保全にみる敷地用途と街並みの変化に着目して, 都市計画論文集, 44.3 巻, pp. 385-390, 2009
- 16) 内海佐和子: ハノイ旧市街 Ma May 通りにおける業種の観光産業化に伴う町並みの変化, 日本国際観光学会論文集, 26 巻, pp.155-160, 2019
- 17) 森下満, 柳田良造, 野口孝博: 変化と多様な町並み色彩形成のしくみ: 函館市西部地区のペンキ色彩との暮らしのかかわりから, 日本建築学会計画系論文集, 70 巻, 592 号, pp.139-145, 2005

<外部発表記録>

冨場星澄, 佐々木葉: 郡上八幡における地域認識としてのサウンドスケープの実態とその構造, 第 17 回景観・デザイン研究発表会, 2022.12.

家田雅之, 佐々木葉, 冨場星澄: 郡上八幡における町並みを構成するファサードの特徴と変化, 第 17 回景観・デザイン研究発表会, 2022.12.